



第1章

横浜の緑の取組と 方向性

1. 緑がもつ多様な役割と機能

緑とともにある横浜の暮らし



横浜の中心市街地から少し郊外へ行くと、そこには多様な生き物が暮らす豊かな森や、水田や畑地が広がる美しい農景観が保全され、緑が街を包みこんでいます。街なかに目を向けると、季節の移り変わりを感じさせてくれる樹々や花が美しく彩られ、潤いと賑わい、街並みに風格をもたらしています。横浜には、これまで市民とともに守り、つくり、育ててきたかけがえのない緑が、暮らしの身近な場所にあります。身近な緑にふれ、関わることで、誰もが緑の豊かさを感じることができます。市内に40か所以上ある市民の森は、散策や森を育む活動ができる自然を感じ、楽しめる憩いの場となっています。また、地域で行われるマルシェで市内でとれる新鮮な野菜を買う、農園で土にふれることを通して、身近にある横浜の農の大切さや魅力を感じるなどができます。さらに、住宅街や商店街など街なかで緑や花をつくり、育む活動は、美しい街並みや、自分の住む街への愛着を生み人と人とを結び、地域の絆を深めることにつな

がっています。

日々のふとした瞬間に、窓から見える樹々や身近な場所の草花に気付き、ひと時でも安らぎを感じれば、すでに緑の恩恵を受けているのかもしれませんが。心のオアシスとなる緑が暮らしの中に編み込まれることで、横浜らしい風景がつくられていきます。



暮らしを支え、 豊かにする緑の存在

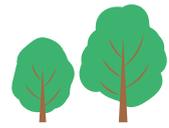
緑は、都市環境を形成する主要な要素です。暮らしに潤いを与えるだけでなく、防災・減災に資する機能をはじめとしたグリーンインフラ※1)としての多様な機能を有しています。そして、これらの機能が発揮されることで、地球温暖化対策やSDGs※2)の達成に寄与し、ネイチャーポジティブ※3)の実現にもつながっていきます。



※1 グリーンインフラ：自然環境が有する機能を社会における様々な課題解決に活用しようとする考え方。 ※2 SDGs(持続可能な開発目標)：2015年9月の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの国際目標。持続可能な世界を実現するための17のゴール・169のターゲットから構成。 ※3 ネイチャーポジティブ：「生物多様性の損失を食い止め、反転させ、回復軌道に乗せる」ことを意味し、2022年の国連生物多様性条約第15回締約国会議(COP15)において設定された新たな国際目標で、その方向性が明確になっている。



緑の多様な機能



コミュニティ形成機能

地域内外の市民の活動の場として機能し、地域コミュニティの強化に寄与。



街の魅力向上・賑わい創出機能

都市の魅力的な緑や花により、賑わいの創出や不動産価値向上など、都市全体の魅力向上に寄与。



環境教育機能

自然とのふれあいを楽しみながら、その大切さに気づき、守り育てる行動につながる環境教育の場としての機能。



防災・減災機能

雨水のピーク流出量を抑制し浸水被害を軽減。オープンスペースとして避難場所や火災延焼防止の機能。



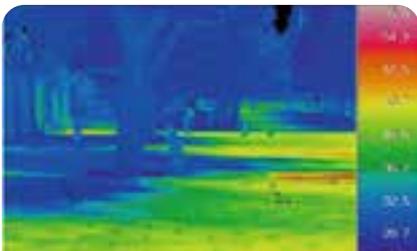
レクリエーション・健康増進・癒し機能

散策や農体験など多様なレクリエーション利用を通じた市民の身近な遊び場、憩いの場、健康づくりの場としての機能。



景観形成機能

快適で美しく潤いのある都市景観や自然と歴史に基づく個性と風格ある都市景観の形成に寄与。



環境保全機能

ヒートアイランド現象の緩和、大気浄化、騒音防止、防塵等の効果で、都市の環境を改善し、市民の生活環境を保全。



かんよう貯留・涵養機能

樹林地や農地などの緑は、雨を大地にしみ込ませ、蓄えることで、河川や地下水の水量を豊かにし、健全な水循環に寄与。



生物多様性保全機能

樹林地や農地が、健全に保たれ、まとまりやつながりを持つことで、生物多様性を保全。

※ グランモール公園での熱環境調査の写真。赤いほど表面温度が高く、青いほど低い。